慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹田の船窓小戯帖
Sub Title	"Sensoshogi-cho" album by Chikuden
Author	菅沼, 貞三(Suganuma, Teizo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.29, (1970. 5) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美学美術史特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00290001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹田の船窓小戯帖

菅沼貞三

(一)

田能村竹田の作になる「船窓小戯」帖については、既にわが先師をはじめ、同学の先輩知友の解説が数多存している。ことに先年(昭和四十年)の秋、東京国立博物館において開催された「日本の文人画展」に出陳してあったので、これが文人画中の屈指の詩画冊であることは、大方の知るところである。私個人として、若い塾生のころから数回これを観賞してきたのであるが、いずれの時も、覗きケースの中で、ただ一図が見開かれていたのを、見つめたに過ぎず、その全貌を知ることなくして過ぎてきたのである。ところが最近に、ご所蔵の田村家の厚意と、保管の東京国立博物館の技官諸君の配慮によって、これが調査と写真撮影とがゆるされたので、親しく品鑑することを得た。よって今ここに、この画帖の全体について小解をこころみ大方の叱正を得たいと思うている。

この画帖の大さは竪二五・八糎、横一五・六糎で、開帖第一紙、竪二一糎、横一二・六糎の中央に一行の小篆体で「船窗小戯」と題僉を書し、その傍に筆者竹田の朱文印「九峯無我衲子」の一顆が捺してある。次紙に七絶が墨書してある。

山開両道海分洋　山は両道を開き、海は洋を分つ

去歳游踪一夢場　去歳の游踪、一夢場
玆冊看時多感慨　玆冊看る時、感慨多し
好当附汝且収蔵　好しまさに汝に附す、且(しばらく)収蔵すべし。

その下に「憲自題」と書し、二重楕円廓朱文印「竹田」を捺し、傍に「庚寅蒲月二十日」と記している。なお同書中の「両道」の右側に「南海山陽両道」とあり、また「洋」の右側に「育王馬磉厳播諸洋」と細記し、また「汝」の右肩側に「耜」と附記している。

右註記の「南海山陽とあるは、いうまでもなく南海道即ち近畿の南にあたって、海洋に沿うた諸州の紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予土佐の諸国をあわせて呼称するのであり、また山陽道は、中国地方の山系の南側の諸州、即ち播磨、備前、備中、備後、安芸、周防、長門の七ケ国を総称するのであって、上古時代に吉備道または西の道と呼称した地方に当るのである。また「海分洋」の右側の註にある、育王は硫黄の音に通じ、硫黄というは海洋の北界に祝島があるによったという説もあるが、通説は伊予灘の転訛したものといわれている。この伊予灘は一名燧(ひうち)灘ともいうことから、馬磉とも記したといわれている。要するに育王、馬磉の名称は、現在の伊予灘一帯の海洋を指したものと推せられる。また厳というは、安芸の厳島のことで、一名宮島という海島で、陸岸との海峡を、今は大野瀬戸、または宮島瀬戸というて、このあたりを昔時、厳洋というたものであろう。播というは播磨灘で、播磨国の沿岸から海を距てた南に、讃岐国に対し、洋上に家島群嶼があって、東に淡路島、西に小豆島に至る海洋の全域を呼称したものである。また傍記に耜とあるは、竹田の一子、太一郎また太一ともいい、名は孝耜、字は躬耕といい、医名を如仙と号した。文化五年（一八〇八）十二月に出生、文政六年（一八二三）十五歳時に、父に伴われて上洛し、蘭法医の小石元瑞（樫園と号す）に入門し、医業の修行をはじめたが、翌七年に熊本の村井蕉雪に従学し、のち文政十二年（一八二九）四月上洛し、再び樫園に師事して、研鑽すること五年にして帰国し、藩医としての功績見るべきもの多々あったと伝えられている。なお年記は文政十三庚寅年五月で、竹田は正に五十四歳時に当る。

次に題僉と同寸法の紙面に、各題詩を有する画図が六面合綴されているのである。今その題詩について、竹田の「自画題語」と照合し、且つ画図の大要を列記すれは左のごとくである。

第一段十川図

臨風傾尽手中杯
又作京華游一回
唯為家人能慣別
簑衣軽上両肩来

風に臨んで傾き尽す手中の杯
また作す京華の游一回
唯だ家人はよく別れに慣れたり
簑衣は軽く両肩に上って来る。

第一　十川図

この七絶の傍に「過十川」と書し、白文小顆の「憲印」を捺している。そして左側の上部に「己丑四月二十三日発佐加関、渡育王洋舟中作此、是日風浪甚恬。」と記入している。己丑は前記のごとく文政十二年に当り、初夏四月下旬に、竹田は一子太一を伴って、佐賀関（現在の佐賀関町にあたり、大分市東方七里の半島の地頭にある小港湾にのぞんでいる。海は佐賀関海峡と豊後水道との隘門で、東北八海里を隔てて、四国伊予の佐田岬と相対している。）を舟出して育王洋（硫黄灘）を渡る船中でこの図を作成した。この日は風浪がきわめて穏やかであったと書留めている。そして「過十川」とある十川は、豊後国竹田の岡城下の北方にあたり、昔時は十川という街であったが、現在は狭田郷に合併せられた村邑である。

さて画図は真向に二峯の山容があって、山肌の凹凸のさまは、淡濃の墨を渇筆描で現わし、これに僅に淡岱赭と淡藍を彩している。そして手前に二株の樹木の立つ道路を、菅笠と蓑衣を着た青衣鼠色の股引を穿いた二人の男子が一人は杖をつき互に語り合いながら歩を進めている。その顔面や樹幹や道端の岩石などに、薄く岱赭を彩し、樹木の葉は細く墨描したまわりに、淡藍をおいている。そして遠景の山裾と路傍の叢などに、青墨と淡墨とを交互に、側筆を用いて、陰隅を施している。かくて霖雨にけぶる岡城下郊外の村道の状景が見るからに塵外の清気、惻々と迫るごとくに、描写しつくしているのである。

第二段松陵渡図

川豁山低沙路平　川は豁（ひろ）く山は低くして、沙路は平かに
菰蒲叢暗晩禽鳴　菰蒲の叢は暗くして、晩禽鳴く
店頭取醉徐々歩　店頭に醉を取って徐々に歩ゆむ
蹈尽残陽又月明　残陽を蹈（ふ）み尽せば、また月明かなり。

その傍に「松陵渡」と書し、白文小顆の「憲印」をおす。次に「二十四日泊青嶼遭雨、篷底把燭写此」と記している。松陵は現時の松岡村で、鶴崎の南方一里半にあたり、犬飼川がここで二手に分れて、西派は乙津川となり、東派は山川となる水郷である。

四月二十四日に青嶼（育王洋中の一孤島に青島がある）に泊って、雨にあうて舟の篷（とまや）の内で燭光をたよりに図写したことが知られる。

画面の上手に焦墨描になる山丘が横たわり、その山裾の水辺に、細い墨筆の菰蒲の葉群が乱れて、そのまわりに淡藍が施されている。岸辺の路の行くつくところに、岱赭色で現わした草屋があり、家内の床几に、それぞれ白、青、朱の衣を着た三人の男子が腰かけている。手前の水際に扁舟が綱止めされている。そして中景の水上を飛禽が群れ、遠景の水上、夕靄の中に二艘の白帆が隠見されてい

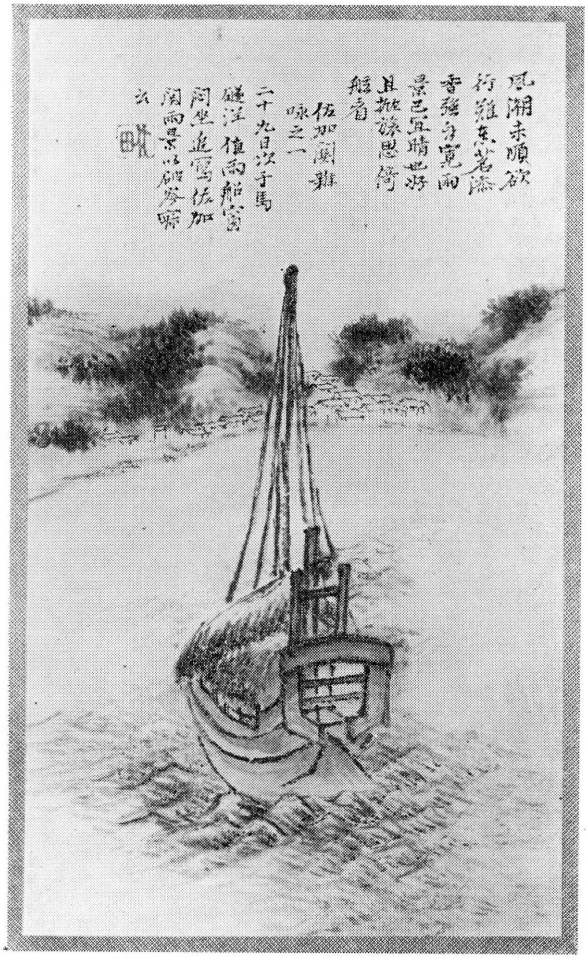
第二　松陵渡図

る。薄暮せまる水郷の情景が、実に静謐な心境を誘うかに描写されている中に、ことに菰蒲の細く鋭い墨描が、看者の眼底に鮮かに印象づけられる。

第三段佐賀関図

風潮未順欲行難　風潮いまだ順ならず、行かんと欲するも難く

煮茗添香強自寛　茗を煮、香を添えて強いて自ら寛ぐ



第三　佐賀関図

雨景已宜晴也好　雨景は已に宜しく晴るゝもまた好し
且抛旅思倚舷看　且く旅思をあげて舷に倚って看る。

次に「佐加関雑詠之一」と書し、「二十九日次于馬磯洋値雨、船窗悶坐追写佐加関雨景以破岑寂云」と記してその下に方廓朱文印「竹田」を鈐している。

この文によれば四月二十九日、馬磯洋（一名燧灘とも称する伊予灘）に止まって雨にあい、船窓の無聊に坐して、佐賀関の雨景を追想し、図写して寂寥をなぐさめたというのである。画面は近景の水上に、帆をおろして停泊する篷船を描き、舟側に平波の打よするさまを写し、対岸に丘陵の横たわる下に、港の聚落が遠望される。すべて濃淡の墨筆を駆使して描破する中に、丘陵や村落の屋根と海上一面とに淡藍を、そして家屋や篷船に淡岱赭を、ごく薄く掃描するのみで、雨景にしずもる港村の寂漠たる情景が、さながらに髣髴されているのである。

第四段梅津寺図

図上の賛に「四月二十六日到三浜過梅津寺寺蘖僧雪雁所創勝景可喜題句云」とあって、

四面無墻不設門　四面無墻無く、門を設けず
老松園繞百千根　老松の園、繞ぐる百千根
虬枝坐見飛騰処　虬枝坐ろに見る、飛騰の処
潮勢駆山山欲奔　潮勢山を駆って、山奔らんと欲す。

その傍に白文小顆「憲印」をおしている。次に「寺僧云三日前杏坪頼先生来游重識」と書している。

試みに竹田の「自画題語」と照合して、その文を書下してみると「四月二十六日、三浜に到り梅津寺を過ぐ、寺は蘖僧雪雁の創むる所、勝景喜ぶ可し、題句に云う」とあって、絶句の前二句が「四面無垣又不門、老松囲繞百千根」となり、後三、四句には異同がない。題の楳は梅と等しく、蘖は櫱が正しく、園繞は囲繞の誤字であったかと思われる。また註記の頼杏坪は、宝暦六年（一七五六）安

第四　梅津寺図

芸国に生れ、頼春水の弟で、山陽の叔父にあたり、広島藩の儒官で、詩文に巧みであったが、天保五年（一八三四）に歿した。

なお竹田の「自画題語」に、梅津寺図と題する一文が収載されている。これを書下すと「嘗て橋竹下の処に於て、胡耀民の松寺図を観て、其の古奥を喜びたり。今茲に己丑の初夏に東上し、予州高浜に於て雨に阻まること累日なり。岸に上りて梅津寺に到る。寺は松際に在りて、其境胡図と頗る肖似たり。頃旧籠を閲みし、此絹を得たり。備人熊谷兄に託す所となる。迺ち胡図に仿うて此を作る。参ずるに王黄鶴法を以てす。兄は竹下と善し、備の豫を去るも亦甚だ遠からず、想うに二君の足跡必ずや渉るべし。請う展閲批評し以

て一噱に資す。」と記している。竹田が胡耀民（明清の山水画家）[註]に倣うて、王叔明黄鶴山樵の画法に参じて、描成したという絹本の梅津寺図は、現存しているか否や未詳であるが、文中の己丑初夏に東上の砌、伊予高浜で累日雨に阻まれて、上陸して梅津寺に到るとあるは、正しく本帖中の梅津寺訪問と軌を一にしている。また橋竹下というは、尾の道の富家橋本竹下（名は元吉、文久二年三月四日、七十三歳歿）で竹田とはきわめて昵懇の間柄であった。〔註、大正十一年四月、菊地家売立目録所収、胡耀民「山水図」山陽箱書。〕

また予州高浜とあるは、本帖中の画讃にある三浜の近郊にあたり、三浜は現在三津浜といい、愛媛県温泉郡にあって、道後温泉に近く、松山市の埠頭に位して、神戸港までの航路百四十七海里という。万葉集巻一に「熱田津爾、船乗世武登、月待者、潮毛可奈比沼、今者許芸乞菜」とある熟田津は、その詞書に「御船伊予熱田津石湯行宮に泊る」とあるごとくに、現在の三津浜に該当するということである。

（二）

さて本帖中の梅津寺図の画面を検するに、遠景と中景の山丘は淡墨の渇筆に、薄く岱赭を掃き、山頂や山腹に生うる樹林は、淡藍をおいて、その上に焦墨の点描を打ち、樹幹に僅かに岱赭を施している。中景の家屋の屋根には岱赭をおき、近景の寺の屋根には淡藍をおく上に、墨筆の条線を引いて、木口に岱赭を彩している。また老松の幹根や参差弯曲せる枝や梢につく針葉など一々墨筆で細かく描いて、その葉のまわりに淡藍を施している。そして根元の大地は薄墨を掃いた上に、焦墨の渇筆を駆使して、松際の古寺の風物を、宛らに描破しつくしているのである。このように山腹や大地に渇筆を用いての淡濃の墨描のうちに、藍岱の淡彩描をもって、形成された山水の景は、さきの「自画題語」中に記す「梅津寺図」の賛中にみるごとく、本図も亦王叔明、黄鶴山樵の画法に参じて、描成したことがうかがわれる。なおまた彼の「自画題語」中の「仿王黄鶴秋林野景図」と題する賛文の中に「近日操觚士は口を開ば必ず北苑・大癡二家を称す。固より画家の正脈たるは論を待たざるなり。然れども人々の追遂は、尽く一途に趨りて、餘師なきに似たり。予の性僻は雷同を喜ばず、故に東上以来、黄鶴山樵を以って帰すると為す。但し筆、意のごとくならず、特に愧嘆を増すのみ」と記しているよ

うに、竹田の山水図にして王叔明、黄鶴山樵の画法に倣うところが見出されるは、またかかる消息のあらわれであろうか。

第五段忠海図

図上の讃詩は左のごとく記している。

蒲田数頃緑扶疎　蒲田数頃にして緑扶疎たり

鱗介為村簇々居　鱗介村を為して簇々と居る

第五　忠海図

昨夜幾星沙際火　　昨夜幾星、沙際の火

朝来皷棹売章魚　　朝来棹を皷いて章魚を売る

その傍に「忠海舟中作」とある。その下に白文小顆の「憲印」が捺してある。次に「忠海距備之尾跋不六七里、未免竹下夢研諸君眷眷乎意中也」と書している。また画図の下部に「二十八日次於芸之大崎候潮戯写所写」と墨書している。

これら図の上下の墨書の中間に、所見の水郷のさまが描写されている。即ち遠景の山丘は淡墨藍のぼかしのうちに、薄く岱赭を彩し、これに焦墨の側筆を用いて山容を整えている。そして水辺の向岸と手前の一端に、墨筆を用いて、菰蒲の群生せるさまを細描している。その中を流水が幾条の淡墨と淡藍との斜線をもって、走り描いて急潮のさまを写し出している。その水上に漁舟が一艘、篷の内には青衣の漁夫が煮炊をし、その炊煙が立ちのぼっている。そして舳先には同じ青衣の二人のうち一人は踞り、一人の童児は片手を踞まる者の背において、先に章魚をつけた棹を持った片手を高くさし出している。篷も舟縁も淡焦の墨描、舟板は岱赭、それに青い衣をつけた人三様の動作が活々と描写されて、諸図中の圧巻ともいうべく、実に爽わやかな野趣が横溢している。

図中に忠海とあるは、現在の広島県豊田郡忠海町で、ここは三原海峡の木下瀬戸と柳瀬戸の合する要衝である。須波の西方二里半、竹原の東一里半の地点に位している。また芸の大崎とあるは現在の安芸国豊田郡の洋上、大島の上島に在って、海峡を距てて安芸国の沿岸竹原に対している。文中に候潮とあるは、潮のみち来るをうかがうこと。なお竹下夢研諸君とあるは、既記の橋本竹下と同じく尾の道の素封家で、当時の文人達（頼山陽、杏坪、竹田など）と交際深き亀山夢研（名は元助、文久三年六十七歳歿）のことで、この両人に対して竹田が意中に眷々たると記しているもまたむべなることである。

第六段播洋図

図上に「四月晦舟過播洋値風」と題して、左のごとく画賛詩と注記を書いている。

碧瑠璃破雪山奔　　碧瑠璃破れて雪山奔り

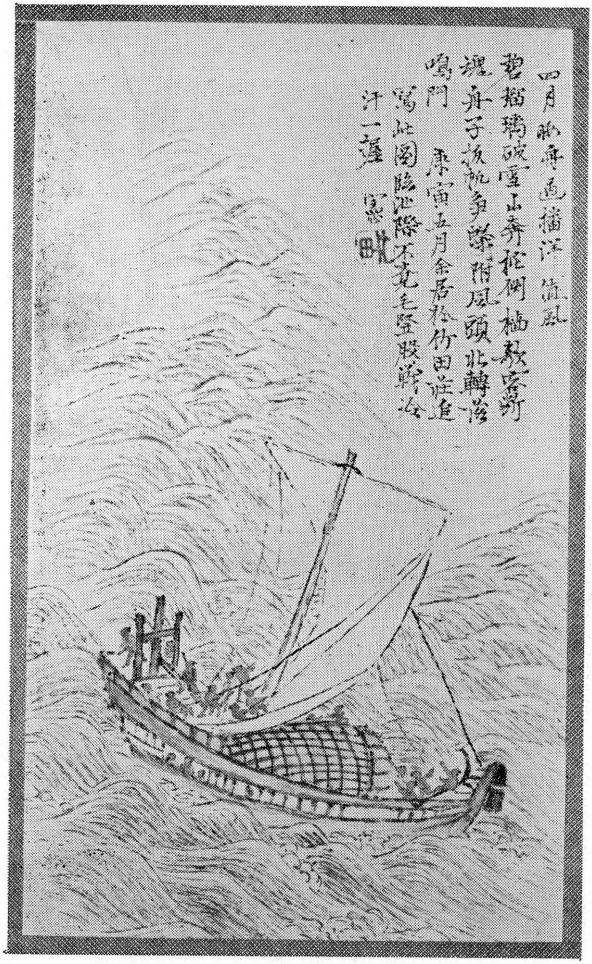
柁側檣欹客断魂　　柁は側き檣は欹ち、客は魂を断つ

舟子板帆争蟻附　舟子は帆を扳いて、争って蟻附す

風頭北転落鳴門　風頭北に転ずれば鳴門に落ちん。

次に「庚寅五月余居於竹田荘追写此図、臨池際不覚毛竪股戦冷汗一握」と記し「憲」と自署して、下に方廓朱文印「竹田」を鈐している。

画面は高巻く波浪の中に、難航する帆船を現出している。波浪は淡焦墨の細筆と淡藍の細線とを交互に引いて、怒涛のさまを描成



第六　播洋図

している。船の上には大きな荷を積み、錨を挙げた舳にも、柁を附けた艫にも、中央にも、ともに疾風を孕んだ帆綱を握って引きつける作業に、専念する十数名の舟子が、蟻のごとくに立ち働いている。そして船側の窓に三人の男子が坐しているさまが描かれている。いずれの人体も岱赭であらわし、舟子は半裸か、青い短衣をまとうている。

註記によって本図は、庚寅即ち文政十三年五月に、筆者が竹田荘において、当時の凄絶な状景を追想しつ、図写し、硯池に臨んで身の毛もよだち、冷汗一握の心底を述べているのである。

以上第一図より第六図まで詩画図は終っているが、次の一紙に左の古詩が墨書されている。

赤霞射処雲如墨　赤霞射る処、雲墨の如し
残日昏黄淡無色　残日昏黄淡として色無し
遠客布襆来買舟　遠客布襆来って舟を買う
佐嘉城西本庄側　佐嘉城西、本庄の側
舟子貪利巧相欺　舟子は利を貪りて巧みに相欺き
唯道今夜風潮宜　唯だ道う、今夜風潮宜しと
隣舟相喚同鮮纜　隣舟相喚んで同じく纜を解き
卸頭接尾陸続之　頭を卸み尾を接して陸続としてゆく
離岸猶未三四里　岸を離れて猶まだ三四里ならず
颶風條自西北吹　颶風條ち西北より吹く
船頭驟叫雪山起　船頭驟に叫び雪山起り
崖巍突在虚空裡　崖巍突として虚空の裡に在り
叫声未尽狂涛到　叫声未だ尽きずして、狂涛到る

一舟施転萍葉似　一舟施転して萍葉に似たり
桅断帆破檣飛去　桅は断ち帆は破れ檣飛び去る
人意与舟相生死　人は意う舟と共に相生死せんと
祷神念仏又呼親　神に祷り仏を念じまた親を呼ぶ
号哭鳴々天地震　号哭鳴々として、天地に震う
至誠通神々有感　至誠神に通じ神感あり
流到磯頭天向晨　流れて磯頭に到れば天晨に向う
倚篷戦立時四視　篷に倚って戦き立つ時、四視すれば
隣舟覆没人溺死　隣舟覆没して人溺死す
十八人内五人活　十八人の内、五人は活き
十人竟不知其屍　十人は竟に其屍を知らず
三人猶蕩白浪際　三人は猶白浪の際に蕩う

と書して、傍に「颶風詩録収太一」とあり、その下に「憲未定草」と書して白文小顆の「憲印」をおしている。

次の別紙に「此帖初めて成るの日、先人は更に舟が浪華港に入るの図、一頁を画いて、児耜に附せんと欲す。因って余白を留めて裝褙せり。爾後先人東游西下するも、画未だ就くこと及ばずして簀を易えたり。今を距る三十余年なり。今茲に庚午の春、偶々敗篋を検して、此笺を得たり。乃ち先人崎游の舟中に、颶風に値うの詩、而して風波険悪舟人狼狽の情状と播洋に風に値うの図と殆んど相似たり。故に今委に糊し、転じて児撝に附す、爾か云う。」と記し、その下に「明治三年庚午初夏、田耜識」と書し、下に白文方形印「田耜」と朱文方廓印「躬耕」の二印を押している。

次に、竹田が左のごとき七言絶句を細美の筆致で墨書している。

此処軽舟読画過　此の処軽舟読画して過す
人家隔竹映清波　人家竹を隔てて清波に映す
停篙今日重追算　篙を停めて今日追算を重ぬるに
爾後経年猶未多　爾後年を経るも猶未だ多からず。

傍に「癸丑四月廿九日高瀬舟中記載」とあり、その下、二行に「時頼兄没後九閏月」と細記している。尚その次に記す三行の漢文を書下すと「山陽頼兄嘗て予を送って高瀬を下る舟中、太一袖せし此画冊を出し示す。頼兄展閲すること数次、喜びて曰く、子と為りて父の筆墨を解す、芸苑の佳事なり。我当に汝が為に跋せんとす。辛卯三月事なり。今を距る僅に三歳。」と書いて、側に「竹田生憲識」と署し、下に楕円廓朱文印「老画師」を押している。

かくて冊末には篠崎小竹の跋文が附している。これを書下すると「竹田翁詩画自ら娯しみ、経を譚ずるを好まず、其の児を遣して、北学せしむること多年なるも、略ぼ厳訓あるを聞かず、或時は同舟して往還し、山を討ね、水を論じ、筆墨游戯して、一に忘年の友の如くす。此帖の如きも亦其の一なり。児耜乃ち能く歓を奉じ、志を承けて其学ぶ所を成す。父子の間孝慈藹然として、人をして歎羨せしむなり。人、謝太伝（謝安、字は安石（三二〇―三八五）晋の名臣）に問うて曰く「那初めより君の児を教うるを見ず」と。公答えて曰く「我は常に児を教う」と。翁の児を教うると其れ諸の人の児を教うると異なる乎。」と書いて傍に「天保発巳、酔を作すの日、翁の父子と共に、雨中に舟游し、夜深うして帰り、其翌、酔醒めて後書す。」と記して傍に「小竹学人弸」と署し、その側に朱文方廓印「小竹」と白文方形印「承弸」の二顆を押している。以上で此帖が終っている。

癸巳は即ち天保四年竹田五十七歳に当り、この春京阪に上って、七月に帰国している。その冬また大坂に向った。小竹学人はいうまでもなく、篠崎小竹、字は弸まれた承弸といい、大坂の儒者篠崎三島の養嗣子となり、儒にして詩文をよくした。資性は温厚で特に頼山陽と親交があり、竹田との交友また浅からぬのがあった。

（三）

木崎好尚の著「大風流田能村竹田」収載の「竹田日譜」を参照してみるに、文政十二年四月十日、竹田は「草坪および医術修行の為、樫園の塾に学ばしむべき如仙を拉へ、癸程上京」とある。そして「四月廿三日、佐賀関発船（天神丸）。同廿四日青島に泊す。同廿六日高浜寄港、梅津寺に遊ぶ。同廿七日盤島（御手洗島）に泊す。同廿八日安芸大崎に在り。同廿九日播磨洋の船中、同三十日兵庫着。五月一日有馬温泉に在り。五月二日大坂着（如仙、先だちて上京、樫園の塾に入る。）」と記している。従って本帖収載の画図中の留書を再検してみるに、第一十川図は文政十二己丑年四月廿三日に洋上の舟中作。第二松陵渡図は同廿三日篷船の内で燭光の下で筆写。第三佐賀関図は同廿九日洋上雨に遭っての船窓で追写。第四梅津寺図は同廿六日訪ねた梅津寺の風景を、第三佐賀関図と同様に、累日雨に阻まれて洋上に停船中に追写したことが、前記「自画題語」中の「梅津寺図」中の一文によっても推考される。而して第五忠海図は図中の註記にみるように四月廿八日、安芸の大崎での所見を戯写したものであろうし、図上の詩は対岸の忠海の舟中詠筆を記したものであろうかと思われる。而して第六播洋図は題にあるように、四月晦、播磨洋で颶風のあうた情景を、翌文政十三年五月に、筆者の家居、竹田荘において、追想筆写したことが知られる。

以上列記することによって、竹田はその子太一を伴って、文政十二己丑年四月十日に豊後竹田を発程し、門弟高橋草坪も一行に加え同四月二十三日に豊後国佐賀関で上船して、伊予灘を渡って、瀬戸内海を航行の途、累日の雨に阻まれ停泊したり、颶風に相遭して、ようやくにして、五月二日に大坂へ到着したものと推考される。その際の船中で目睹した景を、或は戯写し或は追写して、成ったものである。よって本帖の製成は第一図より第五図までは、文政十二己丑年初夏四月下旬、竹田五十三歳時の筆作にかかり、第六図のみは翌文政十三庚寅五月に追写して、その時題僉を書きて、同行の太一に贈与したのである。而して帖末の一紙に竹田は「軽舟読画」の七絶を書し、あわせて此帖を嘗て天保二辛卯年三月、高瀬川を下る舟中で、送別の山陽が展閲し、跋文を草することを約したたが、そのことなくして永世した顛末を、三年後の天保四癸丑年四月廿九日に、同じく高瀬川の舟中で記載しているのである。

かくてまた、その子太一は、此帖の第七図として、父竹田が浪華港図を図写して貼付する筈であったのが、そのことも空しくして天保六乙未年八月二十九日竹田五十九歳で大坂で逝去したので、旧籠から検出した、竹田詠草の未完稿「颶風未定詩箋」を代貼し、これをその子撝（耕策、玄桀、後に孝撝、瘦客と号す）に附与することを書止めているのである。此帖に関する事項の大要は、以上列記のごとくである。

さてこの画冊を通観してみるに、その図上の賛詩は、常に脱俗の境を意企する筆者の風貌がうかがわれるものであり、またその画図においては、瀟洒な墨描と藍赭の淡掃とによって、実に清雅な画致がかもし出されている。竹田の出生は九州の一隅、豊後竹田であるので、一般の美術史上の分類において地方画家と目されているが、その行歴にうかがわれるように、彼は夙に上方地方に往復して、京にあっては詩人学者の頼山陽、名陶家で、学識ある青木木米、詩画人の浦上玉堂、春琴の父子、詩画書の雲華上人、大坂にあっては詩人儒者の篠崎小竹など当時京摂地方の有数の文雅人たちの友交まことに密なるものがあった。それ故に竹田の芸術は一地方画家に偏することなく、京摂文苑の圏内にあって、培かわれ開花し而もその間にあって高く評価されていたことは特に思惟すべきことである。

またその作画法において、近世画史の中には自然の写象に即して、それを巧みに直写して足れりとする傾向のものと、自然の物象を更に豪華瑰麗に、装飾化する傾向のものなど種々存しているが、わが竹田はそのいずれでもない。竹田においては、自然の物象に対して、仮りそめの写生を試みることはあったとしても、そのまま直写することはなく、一旦は自己の脳裡に修めおき、既に体得した中国南画人ことに元の四大家の一者、王叔明、黄鶴山樵の画法に則って、これを自己独特の画技をもって、丹念に仕上げていることが知られる。その竹田独自の画境は如何なるものかというに、第一塵俗を排除し、栄達利欲の雑念をしりぞけた正念をもって、画面に対したことが推考される。

古人の言に「拙を蔵する」というて、皮相的な巧致の技を避け、とりわけ衒気や匠気を排除して、一見拙技とも見まごう遅々とした而もきわめて繊細な筆法によって、その内奥の清純な詩趣を表出せんと努めていることに、目をとめて見る可きである。

竹田の遺作品の中で、おうむね大作の画幅よりも、小品の画冊の方が殊に傑出していると評価されるのは、その筆々刻苦の画技が、小画面にこそ行亘る結果によるためであろう。この船窓小戯帖が、具眼の士によって、珠玉にまごう名画冊と艶説される所以も亦この点に在るのではなかろうかと私はひそかに思うている。(昭和四十五年一月)

参考文献

田能村竹田筆船窓小戯帖讃　田中豊蔵
(日本美術の研究　二玄社刊。国華三五七)
竹田の船窓小戯冊　(画説七号)　脇本十九郎
田能村竹田　大島豊南
大風流田能村竹田　木崎好尚
田能村竹田全集　国書刊行会